

入選

幸せが広がる温贈り

山口県 岐陽中学校

一年 仲子 結菜

私の母は、よく小さい子に話しかける。

「大丈夫？ 何か探しているの？」と、突然声をかけるので、私は気が気でない。

「不審者に思われたら、どうするの。」

私が注意しても、母は大体笑いながら、

「そうね、考えていなかったわ。だって、なにか困ってそうだったんだもの。」

と答えるだけだ。保育士をしている母は、小さい子にすぐ目が行ってしまい、気になるらしい。

私は、どちらかという人見知りがあり、なかなか人に声をかけられない。中学生になり、仲良しの友だちとクラスが離れてからは、不安な毎日だった。

そんなある日、授業で使うタブレットの設定でわからなくなり、困っていると、近くの席の子がていねいに教えてくれた。そのできごとが嬉しくて、日誌に「私も親切にしていきたい」と書いた。

すると、担任の先生から、

「それは、恩送りですね。」

という返事もらった。恩返しではなく、「恩送り」。人にしてもらった恩を、次の人へ送ることで、たくさんの人が幸せになるというすてきな意味があった。さっそく、なにかしたかったのだが、ひとことで親切といっても、なにをしたらいいのか、今の私になにができるのかわからなかった。

母に、今まで人にしてもらったことで嬉しかったことはなにか聞いてみた。すると母は、「今でもはっきり覚えていることがあってね」と嬉しそうにある日のできごとを話してくれた。

私と妹がまだ幼い頃、3人乗り用自転車で出かけていたときのこと。母が赤信号で止まると、中学校の制服を着た男の子に声をかけられたそう。

「あの、これ。」

とだけ言い、息を切らした男の子の手には、12センチの赤い靴が片方握りしめられていたらしい。母は一瞬で、私の妹が靴を落としたことに気づいた男の子が、全速力で追いかけてきてくれたことを理解した。感謝を告げると、男の子はペコリと頭を下げ、走って行ってしまったそう。恥ずかしそうに、でも一生懸命伝えようとしてくれた気持ちが、とても嬉しかったと母は教えてくれた。

私はこの話を聞いて、心が温かくなった。上手な言い方でなくても、小さな行動だったとしても、10年もこうして人の心の中に残り続け、幸せな気持ちにしてくれているからだ。

私は、この温かい気持ちをたくさんの人に贈りたくなった。今なら、人にどう思われるかを考えすぎてしまうより、素直に困っている人に声をかけることができると思う。そして、人が気持ちよく過ごせるよう、ごみ拾いやはき物そろえを心がけている。いつか私のしたことを喜んでもらえて、恩送りの輪がどんどん広がってくれれば嬉しい。

恩送りで温かい気持ちも贈る「温贈り」。私なりに心を込めて贈り続けたい。